

「教育臨床総合研究18 2019研究」

特別支援学校の音楽科授業の実態と展望 — 音楽担当教員に対するアンケート調査を通して —

Current status and Issues
in a music classes of schools for the intellectually disabled

松村 日菜*

Haruna MATSUMURA

土井 瞳***

Hitomi DOI

樋口 和彦**

Kazuhiko HIGUCHI

中村 綾也佳****

Ayaka NAKAMURA

要 旨

特別支援学校では、各学校で、児童生徒の実態に合わせて教育課程を編成している。知的障害特別支援学校の音楽の授業の実態を、小学部・中学部の音楽担当教員に対するアンケートを行い、調査した。その結果、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科として教育課程を選定し、音楽科の授業を行っている教員が多かった。そして、授業で重要視されている支援は環境的配慮が最も多いという結果であった。

〔キーワード〕 特別支援学校 音楽 授業 各教科

I 研究の背景と目的

1. 特別支援学校の教育課程

特別支援学校では、児童・生徒が有する障害の特性や抱える困難性に基づき、学校ごとに指導形態を工夫している。また、実態把握を通して得られる児童生徒一人ひとりのニーズに合わせて教育内容が検討されている。

特別支援学校においては、児童生徒の実態に合わせた適切な教育課程の編成が重要である。特別支援学校の教育課程は、主に次の4種類に分けられる。①幼稚園・小学校・中学校・高等学校の各教科授業に準ずる教育（以下、準ずる教育）、②幼稚園・小学校・中学校・高等学校の各教科授業に準ずる教育の下学年適用（以下、準ずる教育の下学年適用）、③知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科（以下、知の各教科とする）の授業、④各教科の音楽科に替えて、主として自立活動の指導を行う授業（以下、自立活動代替の授業）である。

*株式会社・教育研究所
***鳥取県立米子養護学校

**島根大学学術研究院教育学系
****鳥取県立倉吉養護学校

個別の指導計画に基づく自立活動の内容は、個別で行われることが多いが、効果が期待できる場合、集団でも行われる（文部科学省，2018）。さらに、各教科との密接間関係を保ち適切な指導を行うことが求められている。前述の教育課程①～④のうち、各教科の教育課程である①，②，③も自立活動の内容も含めて行われるが、各教科の目標や内容を明確に設定し行うべきであろう。

2. 音楽に関する授業の教育課程

各教科の中でも音楽科は、身体感覚や感性とのつながりが大きく、教育の効果が期待できる教科として重視され、特別支援学校では重視されている教科である。また、音楽は子どもが親しみやすく、学習に取り組みやすいため、自立活動の内容を扱う場合でも、よく取り上げられている（小山，2009）。

池田（2017）は、自立活動代替の授業でリトミックを用いて「人間関係の形成」や「コミュニケーション」に当たる、集団参加に向かう意識を持つことを目的とした授業を、音楽を用いて行ったと報告している。また、石田・鈴木（2015）は、歌や合奏を通して他者とのやり取りを行い、コミュニケーションを体験することをねらいとした実践を報告している。

音楽は自立活動の内容にアプローチするよく利用される。

3. 授業の形態と課題

藤原（2011）は、特別支援学校での音楽に関する授業は、学部別、学年別の学習集団が編成されるケースが多く、障害の状態、発達の段階、生活年齢などが大きく異なる複数の児童生徒が共に学ぶという複雑な状況が生まれているとしている。多様なニーズをもつ子どもたちを一斉指導するため、大きな課題を抱えている。主な課題として、①個々の実態に合わせたねらいの設定とその達成、②集団の中で個々に合わせた支援をすることの2つが考えられる。

特別支援学校では、児童生徒の状態に合わせたねらいの設定や、支援の工夫が重要であるため、実態把握を通して、適切な教育課程の選択や、発達段階に即したねらいや教材を検討していく必要がある。山出（2010）は、特別支援教育の音楽授業を担当する教師には、①音楽教育についての専門性、②特別支援教育についての専門性の2つの専門性が必要であると指摘している。

特別支援教育についての専門性とは、各障害の医療的な知識・発達心理学等の知見・障害に合わせた様々な指導法などがある。実態把握を通して児童生徒の障害の状況や発達の段階を知り、中心的課題を明らかにしたうえで、個々に合わせて自立活動の内容を念頭に置いた教材や支援方法を工夫して授業を行うことが重要であろう。

音楽教育についての専門性と特別支援教育についての専門性を合わせて、音楽科の授業を検討することで、音楽の特性を生かし、個に応じた授業を計画することができると考えられる。

授業を行う際の支援は、①教科関係なく授業時に必要となる支援（環境的配慮、障害特性に応じた対応等）、②各教科のねらいを達成するための支援、の2種類に分けることができる。①教科関係なく必要となる環境的配慮は、音楽科の授業でも、自立活動代替の授業でも、必要な支援である。②各教科のねらいのための支援は、音楽科ならではの支援であり、選曲や編曲、

楽器の選定、楽器自体への工夫等の工夫だけでなく、曲想を捉えるための工夫や、リズムを感じながらノリを楽しめるような工夫などがある。

4. 器楽の授業について

知の各教科の音楽科は、「表現（歌唱・器楽・音楽づくり・身体表現）」と、「鑑賞」の2つの領域によって構成されている（文部科学省，2018）。表現領域の中でも器楽の内容は、児童生徒の能力に合わせて、ねらいや授業内容が設定しやすく、だれでも楽器を楽しめるように設定できる内容である。また、①音楽科に自立活動の内容を含めて行いやすい、②児童生徒が取り組みやすい、③個に応じた支援や評価が行いやすい、という点も挙げられる。このように、器楽の内容は、個に応じた授業づくりや支援の工夫が行いやすく、児童生徒も親しみやすいため、特別支援学校でよく取り上げられている。

音楽に関する授業（器楽）を行う際の支援は次の6種類に分類されると考えられる。①環境的配慮、②楽器の選定、③楽器そのものの工夫、④選曲、⑤伴奏の工夫、⑥楽譜の工夫である。

器楽の内容は、児童生徒の状態に合わせて柔軟な支援の工夫が可能であるが、一斉指導の中で、個々のねらいを達成することは難しい（藤原，2011）。

授業を効果的に行うために、各教科のねらいを児童生徒の実態に合わせて設定した上で、個に応じた支援を行うことが重要である。

そこで本研究では、特別支援学校の器楽の授業において、設定されたねらいの達成のため、どのように支援が行われているのか、音楽科授業の担当教員へのアンケート調査を通じて、明らかにする。

II 方法

1. 調査対象

山陰の特別支援学校3校の小学部・中学部の音楽科授業の担当教員27名（小学部17名，中学部10名）。3校とも知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校である。

なお、特別支援学校の音楽に関する授業は複数名の教員が企画し、1名のリーダーが授業を進め、その他の教員は児童生徒の補助に当たる場合が多い。本研究の対象者はリーダーとして担当する教員である。

2. 調査期間

20XX年10月～11月

3. 調査方法

内容は、Ⅰ～Ⅲの三部構成となっており、Ⅰでは授業担当グループの基本情報や教育課程、Ⅱでは対象とした児童生徒の基本情報や教育課程、学校生活での様子、器楽の授業の様子、Ⅲでは対象の児童生徒に対して行っている支援・取り組みについての質問事項を設けている。チェック項目による回答、記述による回答がある。

対象者にアンケート用紙を送付し、回答を求めた。送付した42部に対し、27部の回答があった（回収率64.3%）。

III 結果

回答者が担当している授業クラスに属す子どもの障害名をTable 1に示す。

Table 1 障害名の内訳 (n=27)

	知的障害	自閉症	ダウン症	その他
小学部	5	8	2	4
中学部	3	1	1	5
合計人数	8	9	3	9

なお、障害が重複する場合は、複数カウントしている。

まず、「その児童生徒は音楽科授業において、表現領域の器楽の内容に関してどのようなことに困っていると思いますか（複数回答可）」の結果をTable 2に示す。

Table 2 器楽の内容に関して困っていること (n=27)

	知的障害	自閉症	ダウン症	その他
楽器に触れたがらない	0	0	0	0
楽器の演奏ができない	1	0	0	0
楽譜が読めない	4	2	1	2
音を嫌がる	0	0	1	3
楽器の音が原因でパニック状態になる	0	0	0	0
教員の模倣演奏ができない	2	2	2	3
その他	5	7	2	6

どの障害の児童生徒も、楽譜を読むことと教員の模倣演奏をすることが苦手であった。しかし、楽器に触れたがらなかったり、楽器の音が原因でパニック状態になったりすることはなかった。知的障害の児童生徒の中には楽器の演奏ができないことに困っている児童生徒もいる。ダウン症の児童生徒の中には音を嫌がる児童生徒もいた。

次に、「その児童生徒が音楽科授業において、表現領域の器楽の内容に関して、得意なことや興味関心があると思うことはどのようなことですか（複数回答可）」の結果をTable 3に示す。

Table 3 器楽の内容に関して得意なこと・興味のあること (n=27)

	知的障害	自閉症	ダウン症	その他
楽器を演奏すること	6	6	0	6
楽譜を読むこと	0	0	0	1
色楽譜を読むこと	2	3	0	1
音楽を感じることに	4	5	2	4
興味関心のあるキャラクター や曲・楽器を用いた活動	6	2	2	5
模倣演奏をすること	1	4	0	1
その他	1	1	0	1

楽譜を読むことを得意としていたり、興味関心をもっていたりする児童生徒はわずかだったが、色楽譜を読むことは得意としている児童生徒はいた。

どの障害の児童生徒も、音楽を感じることで、興味関心のあるキャラクターや曲・楽器を用いた活動を得意とする児童生徒が多かった。自閉症の児童生徒は、教員の模倣演奏をすることを得意としているものが存在した。

次に、教育課程の知の各教科を選択している割合をFig.1に示す。

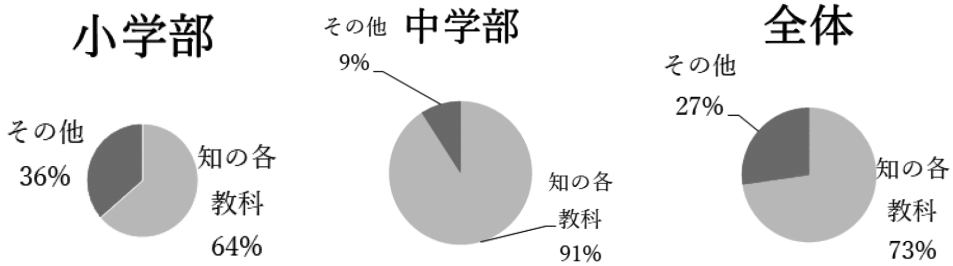


Fig.1 知の各教科を選択している割合

小学部と中学部の両学部とも、多くが知の各教科として音楽科の授業を行っている。

次に、「対象の児童生徒に最も重要だと感じる支援はどれですか」の回答の結果をTable 4に示す。この設問は複数回答可ではないが、複数回答したものが存在した。そこで、複数回答のものも含めて結果としている。

Table 4 最も重要だと感じる支援 (n=27)

	知的障害	自閉症	ダウン症	その他
環境的配慮	6	5	2	2
楽器の選定	3	2	1	3
楽器そのものの工夫	0	0	0	1
選曲	1	1	1	5
伴奏の工夫	1	1	0	0
楽譜の工夫	0	2	0	2
その他	0	1	7	4
未回答	1	1	0	0

どの障害の児童生徒に対しても、環境的配慮が最も多く、楽器そのものの工夫や伴奏の工夫もほとんど重視されていない。器楽のねらいの達成のための支援として重視されているのは「楽器の選定」や「選曲」である。また、自閉症の児童生徒に対する支援は、楽譜を工夫することが重要であると考えられていた。

また、その他の回答は、主に次のようなものがあつた。「落ち着いて取り組める環境づくり」、「教員が楽しそうにすること」、「模倣を促す単純な動き」、「見通しを持ちやすくすること」、「興味をもって取り組める授業づくり」、「集団活動のグループ編成」などである。

次に、「環境的配慮のほかに、学習指導要領に定められる、器楽のねらいの達成のためにしている支援・取り組みがあれば教えてください（複数回答可）」に対する回答結果をTable 5に示す。

Table 5 行っている器楽のねらいのための支援 (n=27)

	知的障害	自閉症	ダウン症	その他
楽器の選定	7	6	3	7
楽器そのものの工夫	3	2	1	4
選曲	6	6	3	8
伴奏の工夫	2	4	2	4
楽譜の工夫	4	5	1	7
その他	3	2	1	4
未回答	0	1	0	0

器楽のねらいの達成のための支援は、どの支援も行われている。

最も重要だと感じる支援 (Table 4) でも挙げられていた「楽器の選定」や「選曲」は、どの障害の児童生徒に対しても多く用いられている。一方で、最も重要だと感じる支援 (Table 4) ではほとんど挙げられていなかった「楽器そのものの工夫」や「伴奏の工夫」の支援が行われている。知的障害の児童生徒に対しては、伴奏の工夫は行われていなかった。

また、器楽のねらいの達成のために行っている支援それぞれについて、具体的な支援方法の記述回答を分析したものを、Fig. 2 に示す。分析用フリー・ソフトウェア「KH Coder」を用いて、テキスト型データの出現語でクラスター分析を行った。出現パターンの似通った語の組み合わせをデンドログラム (樹状図) に表したものである。

樹状図のグループは、「色楽譜と階名シールのマッチング」、「演奏しやすいテンポの伴である。「曲・楽器の選定」と名付けた。

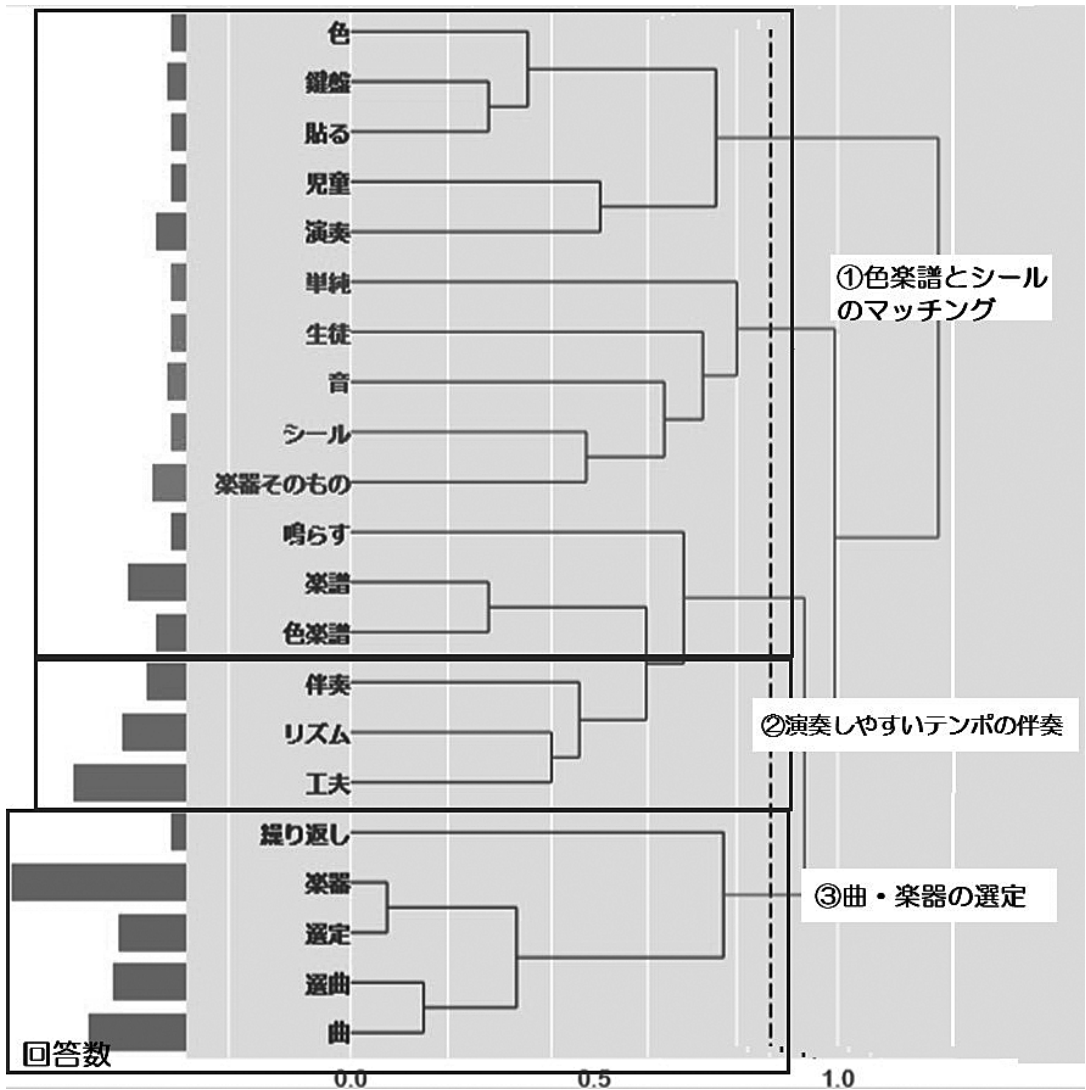


Fig. 2 行っている器楽のねらいのための支援（記述部分）

さらに、コーディング結果（テキスト型データをカテゴリー別に分類）を、Table 6 に示す。

コード名	コーディングに用いた主な語	回答数	割合
* 曲・楽器の選定	繰り返し、操作、鳴らしやすい	12	44.44%
* 色楽譜と階名シールのマッチング	色楽譜、音名シール、貼る	8	29.63%
* 演奏しやすいテンポの伴奏	伴奏の工夫、意識しやすい	1	3.70%
(文書数)		27	

「曲・楽器の選定」「色楽譜と階名シールのマッチング」「演奏しやすいテンポの伴奏」の該当する記述の回答数とその割合を表に示している。

IV 考察

本アンケートの結果は、次のようにまとめることができるだろう。①対象の児童生徒の多くが知の各教科としての音楽科授業を受けていること (Table 3), ②楽譜を読むことを苦手とする児童生徒が多く、色楽譜などの楽譜の工夫がされていること (Table 1, Table 2), ③最も重要だと考えられている支援は環境的配慮であること (Table 4), ④行われている器楽のねらいの達成のための支援は楽器の選定や選曲が多いこと (Table 5), ⑤楽譜の工夫や楽器そのものの工夫として行われている支援のほとんどが色楽譜と階名シールのマッチングであること (Table 6), ⑥伴奏の工夫はリズムやテンポに関するものがほとんどであること (Table 6) である。

①の状況を前提に、②～⑥の内容を検討するとき、今回のアンケートの回答結果から浮かび上がってきた問題点は、知の各教科の音楽科として器楽の授業を行っているという回答が最も多かったのにもかかわらず、自立活動の内容に重点が置かれた回答が多く、音楽科のねらいの達成を目指しているとは言えないということである。

特別支援学校では、個に応じた教育をするために、教育課程を工夫することになっている。その中で、準ずる教育や準ずる教育の下学年適用、知の各教科を選択する場合は、自立活動の内容を含めて指導するが、いずれも教科として授業のねらいを設定しなければならない。

今回のアンケートの結果によると、選択された教育課程は知の各教科が最も多いため、音楽科の目標を設定し、そのもとで授業のねらいが設定されているべきである。しかし、支援方法で最も重要だと考えられている支援は、自立活動の内容に関連する「環境的配慮」であり、各教科の目標を立てていない。

そこで、器楽の視点から、「楽器の選定」、「楽器そのものの工夫」、「選曲」、「楽譜の工夫」、「伴奏の工夫」のそれぞれに関して、具体的な支援方法を検討したい。

まず、楽器の選定は、既存の楽器の中から児童生徒が扱いやすいものや、興味関心を引きやすいものを選ぶ方法がとられていた。しかし、そのほかにも、曲に合わせた表現のできる音色の楽器を選定したり、リズムや音の重なりなどを感じられる楽器を選定したりすることができる。それによって児童生徒が、楽器の音色と音楽の構造との関わりに気付いたり、音を合わせて演奏する技能を身に付けたりすることができるだろう。

楽器そのものの工夫は、音符を色に置き換えた色楽譜とともに、鍵盤楽器の鍵盤に貼る色の階名シールとマッチングさせる方法が主な回答であった。この方法は、自閉症の児童生徒はマッチング課題が得意であるという報告 (紺野・細谷, 1998) もあるため、自閉症の障害特性に合わせた支援として効な支援であると考えられる。

そのほかにも、児童生徒の身体の状態によって、音の鳴るものを身につけたり、音を鳴らしやすいように楽器を改造したりするなど、手作りの楽器を用いるという支援も考えられる。それによって、身体の動きに困難を抱える児童生徒でも、音を出したいときに表現がしやすくなったり、既存の楽器がうまく演奏できない児童生徒でも、表現したい音楽表現がしやすくなったりするだろう。

選曲は、既存の曲から児童生徒の馴染みのある曲や単純な曲を選ぶという方法がとられていた。しかし、そのほかにも、速さを変えることで雰囲気が変わる曲や、音の重なりがわかりや

すい構成の曲を選ぶなどの工夫が考えられる。そうすることで、児童生徒が曲の雰囲気や曲想と音楽の構造の関わりに気付いたり、友達の楽器の音を聴いて合わせたりすることができるだろう。

楽譜の工夫は、鍵盤楽器の鍵盤に貼る色の階名シールとともに、音符を色に置き換える色楽譜をマッチングする方法が主であった。さらに、音楽科の内容を学習するため、色のマッチングに加えて、音の長さを意識できる箱楽譜や、注目しやすい好きなキャラクターの絵を楽譜に用いることで、演奏のタイミングを示す工夫することが考えられる。そうすることで、児童生徒が音楽の構成に気付いたり、音の長さやリズム、速度を意識して演奏したりすることができるだろう。

伴奏の工夫は、児童生徒が演奏できるようにテンポを遅くしたり速くしたりして、合わせる工夫が行われている。さらに、リズムを感じやすいように、拍感を強調するような弾き方や、曲の雰囲気によって強弱や音域を工夫した弾き方など工夫することが考えられる。そうすることで、楽器の音色と全体の響きの関わりに気付いたり、音色や響きに気を付けて合わせて演奏することができたりするだろう。

このように、音楽科の視点から考えると、器楽のねらいの達成を目指し、様々な支援の工夫ができるのではないかと考えている。

IV まとめ

今回のアンケートの回答では、児童生徒の障害や学校生活の実態把握等、自立活動に関連する記述が多かった。しかし、音楽科の目標を達成するための実態把握が必要ではないだろうか。

音楽科における能力や技術を把握することである。例えば、器楽の内容であれば、次のような内容が考えられる。①どのような楽器であれば音を鳴らすことができるのか、②どのような楽譜を読むことができるのか、③どの程度のリズム打ちをすることができるのか、④鍵盤楽器の音階の演奏ができるか、⑤音の強弱を調節できるか、⑥タイミングを合わせて音を鳴らすことができるか、などである。このような実態把握を通して、個々の児童生徒それぞれに、目標設定が必要であろう。

謝辞

最後に、本論文の作成にあたり、お忙しい中アンケート調査に快くご協力くださった、山陰の特別支援学校3校の小学部・中学部の音楽担当教員の皆様をはじめとする、関わってくださった皆様に心から御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 藤原志帆 (2011) 特別支援学校における音楽の授業づくりを支える実践事例集に求められる要件. 日本教科教育学会誌, 34, 61-70.
- 2) 池田彩乃 (2017) 集団での活動や思いを表現することを目指した音楽活動の工夫. 帝京大学大学院教職研究科年報, 8, 216-217.
- 3) 石田麻莉奈・鈴木慎一郎 (2015) 障害を抱えた子どもへの音楽ワークショップの実践. 鳥取大学地域学部卒業論文, 52-58.
- 4) 紺野元樹・細谷雄一 (1998) 特殊学級における買い物学習の初期指導. 情緒障害教育研究紀要, 17, 139-148.
- 5) 小山朱美 (2009) 音楽療法的アプローチに着目した中学校特別支援学校における音楽科授業の提案と実践. 音楽教育の未来, 353-368.
- 6) 文部科学省 (2018) 特別支援学校学習指導要領解説.
- 7) 山出智世 (2010) 特別支援教育における器楽指導. 音楽実践ジャーナル, 7, 41-47.